○響堂山石窟

水野清一
長廣敏雄 共著

本書は河南・河北の省境に近き響堂山石窟に關する精細周到なる實査研究の報告書であつて羽館氏の撮影にかゝる多數の見事な寫眞と、又少なからぬ拓影とを收め、先に公にされた房山雲居寺の研究について、支那佛教美術考古學界に贈られたる貴重なる一册である。

今その大綱を簡單に記するならば、本書は先づ篇を三つに分ち、その第一篇を南響堂山石窟に、第二篇を北響堂山石窟に、第三篇を響堂山石窟論に當てゝある。前二者に於いては個々の洞窟に關する精細確實なる記述を眼目とし、併せてその年代にも及び、第三篇は上記二篇の調査研究の結論として齎らされた北齊石窟の美術に關する著者の見解であつて、

龕の形態及び配置(一壁一龕制を原則とし、寶壇制より更に無龕制への過渡の樣式を示しつゝ三壁分立の散開的な傾向を取つて、求心的な前代のものと著しい對照をなし、龕はその統一力を弱めて漸次壁による統一力に轉化しつゝある事)

石窟空間(北魏代の諸窟が多く穹窿形の天井に營まれたのに對し、こゝでは天井は平たく水平なるもの多くして石窟空間は立方體形をなし、又特にその洞口に見らるゝ如く、全體として、本來龕構造と異質的な木造的構築の風を著しく帶びて來て居る事)

等の構造や、

諸尊の造樣(前代の左右均制的な硬直なるものより漸く脱して、ここでは肉體の表現が重んぜらるゝ樣になり、全體として丸味を帶びて溫和の氣をたゝへる風が著しくなつた事)

更に蓮華飾や、拱額、唐草等の裝飾に及ぶまで各方面よりよく北齊の特色を闡明にし、又以て北齊石窟の北魏より唐に至る支那佛教美術界に於いて占むべき位置を明かにしてゐる。

思ふに本調査は昭和十一年の春抗日北支の危險を冒して行はれたものであつて、北響堂山が僅々三時間半の瞥見より許されなかつたが如き、よくその事情を語るものである。本書の收むる處、實にかゝる困難な事情を推しての調査であつた事は特に我々の感謝すべき點であつて、殊に響堂山が支那佛教美術史上重要な位置を占め乍ら未だ充分なる踏査も行はれず、寫眞の如きも僅々數葉を手にし得たのみであつた事を思へば、一層その感を深うするものである。

又その研究の方法に關しても從來の研究に於いて屢ゝ行はれた樣な尊像の樣式を中心とする方法から離れて、之を更に全體的構成に於いて論ぜられた事は大いに學ぶべきであつて、彫像の待つ積極的な藝術的空間に對して、之を限定しこれを包んで消極的に働きかくべき龕—壁—に對する注目は、近時この種研究に於いて次第に動きつゝあつた新しい傾向であるが本書によつてそれが美術史的なると共に更に考古學的正確さを以つてなされた點は又注目すべき事と考へる。(四六倍版、本文一五七頁、圖版六七、英文概要一〇頁、東方文化學院京都研究所發行、定價五圓)

(岡田芳三郎)